【 緑地を楽しむ本 】

『太陽のかがく』

監修　渡部潤一　　絵と文　えびなみつる　　写真　中西昭雄　　旬報社

　来る５月２１日には、お天気が良ければ、金環日食を見ることができます。これまでにも１９５８年に八丈島や、１９８７年に沖縄などで見ることはできましたが、今回の金環日食は大阪や東京などの大都市で見ることができるという、非常に珍しい貴重な機会なのだそうです。　そのせいでしょうか、本屋さんに行くと　主に子ども向けに日食観測用のメガネの付録のついたガイドブックが多数、平積みされています。どれも日食の観測の仕方、時間等が詳しく書かれ、「そのついで」という感じで太陽について書かれてもいます。　が、限られたページにギュウギュウと詰め込まれたように書かれた「太陽」は、子どもには（大人にも・・）「難しい天体」にしか見えないような気がします。

『太陽のかがく』では、まず「はじめに」で、太陽というのは、夕日や日食、グリーンフラッシュやオーロラなどの様々な現象を見せてくれるだけでなく、昼を私たちに与え、生物を育て、洗濯物を乾かし（！）、電気も生み出してくれるありがたい存在だと述べています。　特に子どもたちにとっては、そこにあることがあたりまえのようで、改めて言われなければありがたみを感じることは少ないかもしれません。

１ページ１ページ　大きな絵と写真で「太陽」に迫っていきます。太陽の直径は地球の１０９倍。太陽の中心部では、１５００万度の高温と２０００気圧の圧力の中で、１秒間に６億トンの水素がヘリウムに変わる核融合反応を起こしているとか。　でも、そこから放出されるエネルギーのうちの、たった２２億分の１が地球に届いているだけで、「地球上のすべての生命をはぐくんでいる」のだそうです。太陽の放つエネルギー量の凄さと太陽との距離をあらためて感じさせられます。

　金環日食と皆既日食についても、見開きの左右のページに並べて説明され、その違いがよくわかります。金環日食と皆既日食、違う事は知っていましたが、どういうふうに違うのか、どうして違うのか曖昧なままにしてきたことが、よく理解できました（月の軌道が楕円のせいなんですね）。文字の数は、それほど多くなく、難しい言葉も少ないのですが、太陽について親しみと理解を深めることができる本だと思います。

では、５月２１日朝７時、スッキリとした五月晴れを願いましょう！

（遠藤美子）